春風秋霜 12月号

平成２９年１２月１日
島田市教育委員会だより
教育長　濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む　　佐藤一斎

1　「しまだ大井川マラソン in リバティー」に参加して

10 月 29 日（日）しまだ大井川マラソンが開催されました。今年は雨の中での開催でしたが、完走率が 89.6%と予想に比べ大変高くなっていました。雨の日は、呼吸が楽なので走りやすいと上位入賞者は話していました。しかし、６時間を超すタイムで走る参加者にとっては、寒さが堪えたようでした。

中高生のボランティアは、雨の中でも頑張ってタグ外しや荷物渡しをしていました。雨対策をしていない生徒もいたため、健康に不安を感じました。雨対策を事前指導する必要性を痛感しました。

今回、マラソンアドバイザーの荻原健二さんから、若い時は良い結果が残せず、劣等感を持つことが多かったと聞きました。しかし、その劣等感をばねにし、一流選手を目標に努力した結果が、冬季オリンピック複合での金メダルになったということでした。自己肯定感を高めることはもちろん重要ですが、失敗や劣等感をばねに頑張る強い心の育成も大切にしなくてはならないと思いました。

２　インドネシア・カンボジア民間大使との交流について

中央大学加藤教授がインドネシアとカンボジアの大学生を連れて小学校を訪問しました。各国の言葉や文化を紹介するこのプログラムは、今年で３年目を迎えました。自国を日本と比較しながら紹介するなど、プレゼンテーションの仕方が、少しずつ進化していると思いました。

加藤教授との話では、学生たちは各国の指導教官から厳しい指導を受けて、プレゼンテーションの場に立ったそうです。インドネシアのジャワ人は、公衆の場や目上の方の前では、大きな声を出すことがタブーになっているそうです。それなのに、今回の訪問では、テンションを高め、大きな声で説明していました。民間大使の皆様の努力に感謝です。

この交流を体験した子供たちが、日本との比較の中で、両国の理解を深めてくれたらと思います。また、外国に興味をもったり、外国人に親しみをもったりするきっかけになったらと願っています。

３　市内小学校音楽発表会に参加して

11 月７日（火）に行われた発表会では、各学校の素晴しい演奏が行われました。全体的には５年生の発表が多かったものの、湯日小学校のように１年生から３年生による発表や、伊久美小学校のように全学年で取り組んだオペレッタもありました。子供たちの発表後の満足そうな様子を見ていると、この発表が子供たちの大きな自信になったと思いました。指導していただいた先生方には、ご苦労もあったと思いますが、心から感謝します。

開会式では、市歌の合唱も行われましたが、ほとんどの子供が歌詞を見ないで歌っていたことに感動しました。私が校長会において、「市歌を歌う機会を設けてほしい」とお願いした後、

一部の学校の文化祭等で市歌が歌われていることは知っていましたが、どの学校の子供たちも歌うことができるとは思っていませんでした。

島田市歌は、島田市の魅力を歌いこんだものです。市歌を歌うことのできる子供たちが成長し、多くの市民が市歌を歌えるようになったら、それも島田市の大きな財産だと思います。

４　キャリア教育について

11 月 8 日（水）に行われた市町教育委員会研修会において、県教委義務教育課長から全国学力・学習状況調査における小学校のキャリア教育についての質問「児童に対して、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしていますか？」の回答結果が、全国と比べ１4%も低いことが課題であると指摘されました。

これまでも、小学校の教員は、キャリア教育を実施していても自覚していない傾向がありました。それは、キャリア教育を進路指導と狭く捉える傾向があったからです。しかし、キャリア教育は、係活動や清掃活動など自分の責任を果たすことや、気持ちのよいあいさつなど、社会に出た時に役立つ資質の育成も、子供の可能性を広げるキャリア教育の一部です。朝の会などで行う、様々な分野で活躍している人物の紹介もキャリア教育になります。

1 時間の授業として行う指導のみがキャリア教育ではありません。これまで行ってきた指導や活動を、キャリア教育という視点をもって行うことが必要です。

肘かけ椅子

畑　活年　　教育部長

年の瀬に入り、間もなく今年のＮＨＫ大河ドラマ「おんな城主　直虎」の TV 放送が終了する。大河ドラマは、日本にある数々のドラマの代表格として、昭和 38 年に放送開始の長寿番組であり、その作品の多くが、戦国の乱世を生き延びた権力者たちの生涯を描いた一代記である。毎年１月に初回が放送されるが、いつも見ようか、やめようか思い悩む。見始めれば、やはり最終話まで見てしまわないと気が済まない。これまでにも、「新選組」や「軍師官兵衛」、前作の「真田丸」などにふけてしまい、よかれあしかれ多くの時間を消費したことを思い出す。

今回は、井伊直弼でなく直虎といった、自分にとっては無名の主人公であったにも拘わらず、これまで同様、その生き様に惹きつけられてしまった。

こうしたわけで、どっぷりと“大河”に呑み込まれ、井伊家菩提寺の「龍潭寺」、商人のまちとして栄えた気賀に造られた「おんな城主直虎大河ドラマ館」、はたまた、静岡市立美術館の特別展「戦国！井伊直虎から直政へ」を見に行くなど、県内各地で開催された直虎の足跡を巡るはめとなった。もちろん、「女戦国大名寿桂尼と今川氏」展を開催したわが市の博物館も渡航先となった。

毎回ドラマの最後に、静岡の戦国史ゆかりの地を巡る「直虎紀行」がある。数回前には、武田と徳川の戦いの城となった諏訪原城跡が紹介され、戦国の世とのつながりが全国の多くの歴史ファンの耳に届いたものと思う。

第 40 話に、直虎が徳川家康を『非凡なる凡人』と評して発した言葉がある。この意味は、自分が凡人であることを踏まえ、何をなすべきかを捉え、平凡なことでも積み上げていく、やるべきことをきちんと見出し取り組み続けることは、きつく大変なことであるが、これができるのが非凡であり、家康は正にそうした方だとしている。人生哲学として、平凡な自分への銘として心に留めておきたい。